

チャールズの回心理解について—— “One Thousands Tongues”を中心として

坂本 誠

チャールズ生誕300年を迎え、本年度のウェスレーメソジスト学会においては、チャールズ・ウェスレーを題材にした公開シンポジウムも開催された。世界ではチャールズ・ウェスレー学会も存在するが、日本においては、ジョンは注目されても、チャールズには焦点が当てられてこなかった傾向がある。しかし、これをきっかけに、日本におけるチャールズ・ウェスレーの研究においてよいスタートとなったと考える。

この論文では、特に、チャールズの回心に焦点を当てながら、チャールズの回心が、代表的な回心を歌った讃美歌にいかんにか反映されているかを考察したいと思う。チャールズの回心をみるためには、チャールズの生涯の中で、特にアメリカにおける出来事から見ていかなければならない。

I. アメリカでの出来事

チャールズは、当時アメリカジョージア州の責任者であったオグレスープの秘書としてフレデリカというアメリカ南部の町に渡る。彼は、オグレスープの秘書を勤めつつ牧会を行う。牧会といっても、礼拝もドラムを鳴らして礼拝が始まるという具合で、礼拝堂も最初は存在しておらず、アングリカンの礼拝に慣れてきた彼にとっては、それだけでもカルチャーショックを受けたのではな

いかと推測される。チャールズは、ジョンよりも、英国教会の教理や実践に忠実であったと言われている。それは、信徒伝道者の起用に反対したことや、最終的に按手札を施す時に、司教でもないジョンが按手札を施すことに反対したことにも現れている。

よく、ジョンやチャールズの牧会はアメリカでは失敗であったと言われ、ジョンの場合は、特にカトリック的色彩の強い牧会を移民達に強要したことがあげられる¹。しかし、ジョンもチャールズも、自分の役割を忠実に果たしたことは疑うことはできない。ナザレン教会のチャールズ研究者ミッシェルによれば、律法的な規律が優先する説教に、多くの人々は厳しさを感じて、福音として受け取ることができなかった。チャールズもその点に関しては強情であった。住民の反感を買い、その上、チャールズは浮気をしているというゴシップをたてられる。その結果、オグレスープもチャールズに対して厳しくあたるようになり、アメリカを離れざるを得なかった。チャールズは食べ物が喉に通らないほど衰弱していたが、ジョンがフレデリカに向かい、森を散策しながら、ラテン語でチャールズを励ました程であったとしている²。

1736年7月26日、チャールズはジョージアを出発、一時ボストンに寄航する。当時のチャールズは起きる力もなく、寝たまま船外に運ばれたほどであった。チャールズはボストンから何通かの手紙を出しているが、絶望的な状況を語っている。しかし、その後、ボストンからロンドンに向かう船の中でかなり回復し、1736年12月3日にロンドンに到着した。その後も、アメリカに再び戻ることを考えたチャールズであったが、体調がそれを許さなかった。筆者は、このチャールズの姿勢により、彼の牧会者としての責任感と自分のやってきた事に対する確信があるように思う。しかし、多くの人々との関わりの中でチャールズの心が傷ついたことは否めない。

¹ ジョンとチャールズのアメリカでの牧会が失敗であったということに関しては、反論もあることを理解していただきたい。

² ラテン語を使用したのは、誰にも立ち聞きされないようにという配慮であった。

T.Crichton Mitchell, *Charles Wesley—Man with the dancing heart*, (Beacon Hill Press of Kansas City 1994), pp.49-53 参照。

II. チャールズの回心

チャールズの回心は、1738年5月21日、ジョンの回心の3日前に起こるが、ミッシェルによれば、これを「神が働いた変化」と呼んでいる³。それは以下のような讃美歌である。

私が最初に心から信じた時、神に対する信仰をもって信じた。
聖霊の力を受け取り、私の救い主と呼んだ⁴。

さらに、彼は以下のように表現する。

律法的な努力は突然止めにした。私は嘆き悲しむのをやめた。
私の第2の、真実の生き生きとした人生を、私は生き始めた⁵。

しかし、この回心は突然起こったのではなかった。そこに至るまでには、多くの取り扱いをチャールズは受けた。チャールズの回心を語るに当たり重要人物は、ジョンの場合もそうであったが、モラヴィア兄弟団のペーター・ペーラーである。ペーター・ペーラーは、アメリカのジョージアに行く途中、ドイツから英国へ立ち寄った。それは、1738年2月7日の事であった。同年、5月4日にカリフォルニアに向けて出発するのであるが、その間、3ヶ月程ロンドンに滞在する。ペーターはジョンとチャールズと出会い、二人が個人的な救いの確信を持っていないことを敏感に感じ取る。

ミッシェルの本を参考にその日を再現すると以下ようになる。チャールズは、その日、病床についており、ペーラーに祈ってもらおう。そこで、ペーラーは以下のように質問する。

³ Ibid.,pp.59-60.

⁴ The Poetical Works of John and Charles Wesley,ed.G. Osborn (London:Epworth Press, 1868-72),1:300.in Mitchell,p.60. ミッシェルによれば、この讃美歌の7節は讃美歌62番「主イエスのみいつと」の開始と一緒にあるとする。

⁵ The Poetical Works of John and Charles Wesley,1:300.

彼（ペーラー）は、私の手を取り、静かに言った。「今はあなたは死ぬことはありません。……」彼は私に「あなたは救われたいと願いますか」と尋ねた。

「はい」「なぜそう望むのですか」「なぜならば、私は神に仕えるための最善の努力を使い切ったからです」彼は頷き、何も語らなかった。私は彼を無慈悲な人と思い、自己判断をした。「私の努力は希望への十分な基盤ではなかったのか。私の努力を彼は奪い取っていくつもりなのだろうか。私には何も信頼するものはない。」⁶（傍線筆者）

チャールズは、病気が重く、念願のアメリカ再び渡ることも延期しなければならぬほどであった。チャールズは、ペーラーに自分の不信仰を告白し、赦しが必要であることを告白する。チャールズは、当時の英国教会の教理にあるように、聖化が先で、義認が後に来ることを信じていたので、救われる為には自分の努力が不可欠であると考えていた。ここにはジョンよりも英国教会の教理に忠実であったチャールズらしい葛藤、そして、ペーラーが伝えようとしていた新しい福音への抵抗が見られる。それは、「私の努力は希望への十分な基盤ではなかったのか。私の努力を彼は奪い取っていくつもりなのだろうか。私には何も信頼するものはない」という言葉によく描かれている。信仰義認に堅く立つモラヴィア派の信仰のあり様は、これまでのチャールズの生き方とは異なったものであったのである。

さらに、記さなければならないことは、病弱であることと救いの関係である。ペーラーとの出会いにより、これまで彼が慣れ親しんでいた英国教会の教理とは別の信仰義認の教理に目覚めた彼は以下のように語る。それは4月28日の日誌である。

朝、コックバーン博士が、よりよい医者であるペーター・ペーラーを伴い私に会いに来た。彼は私の隣に座り、私の為に祈ってくれた。私はこの出来事

⁶ The Journal of the Rev. Charles Wesley, M.A. (Beacon Hill Press of Kansas City, 1980), 1738.2.24. (以下 Journal と記す)

や、最近の病に神の計画を見た。私は即座にそれを考慮した。それは、ベレーの信仰の教理を再び考えるべきかどうかということであり、私は信じていたかどうかを調べることに、私がそれを獲得するまでは、求めたり、望んだりすることをやめてはいけないということであった⁷。

このように記した後、チャールズは、ピアース氏より礼典を受けて以下のように語る。

私は今、モラヴィアの教理である「人は赦しの確信を持たなければ平安を持つことができない」という教理に反する例証を持っている。私には平安がある。しかし罪が赦されたという確信はない⁸。

チャールズが礼典を受けることによって信仰の状態を確認していたことは興味深い。しかし、当時のチャールズには、聖餐を受けることによる平安はあるが、確信がなかったというのである。ここにも、モラヴィア派の根本的教理である確証の教理に対する反発が見られる。筆者は、確証のない信仰、弱い信仰も段階的に認めるウェスレーの理解と、確証と平安を結びつけ、確証が瞬間的に与えられるというモラヴィア派の教理の聞き合いを見ることができるようになる。実は、この違いが後に、ジョン及びチャールズがモラヴィア派から乖離していく原因でもある。しかし、その時点においては、チャールズにとっては、確証がない自分に対する欠けの認識の方が大きかったのである。

1738年5月のチャールズの日誌には信仰を求めている彼の姿があらわれている。特にキリストの知識を増したいというキリストへの思いが強くなっていく様子が描かれている。その後、ベレーはカリフォルニアに行かなければならず、彼の後を引き継いでブレイ氏がチャールズの相談役となる。ブレイ氏は、チャールズの弁によれば、「貧しい、無知な機械修理工であるが、キリストのみ

を信頼している人物」であった⁹。当時のチャールズの問題は、回心体験（確証）が即座に与えられることが果たして可能であるかということであった。チャールズの頭の中には瞬時の回心体験という概念は存在しなかった。二人は信仰が与えられるように共に祈る。1738年5月12日の日誌は以下のようなものである。

私は、祝福された気持ちをもって起き、神に飢え渴きを覚えた。私は、イザヤ書を読み始めた、私に対して約束が与えられたことを見つけた。キリストが私を愛しておられるので、その約束が果たされると感じた。私は信じなければならぬことをさらに望み、確信した¹⁰。

ここには、チャールズが福音書の約束は全ての人々の為であると同時に個人的にも与えられるという確信に目覚めたことを記している。この数日、多くの人々がチャールズを訪問するが、チャールズの信仰は揺れている。チャールズの日誌には、弱さや絶望という言葉が目につく。

しかし、5月17日に一つの変化がおとずれる。それはアングリカンの友人であるホーランド氏によってルターのカラテヤ書が紹介されたのである。チャールズは信仰義認という新たな概念に出会うのである。日誌によれば、「信仰義認は、死んだ信仰ではなく、愛によって働く信仰、そして良き業とホーリネスを生み出すことのできるもの」であることに気づく¹¹。

チャールズの研究者、タバrahamは、ルターからチャールズが学んだ事として、積極的義と消極的義という概念を挙げている。チャールズは積極的義である行為義認は認識してしたが、積極的義は、受動的義（信仰義認）の結果起こるものであることに気づかなかったとしている¹²。チャールズは、ここに来て、

⁹ Journal, 1:86.

¹⁰ Journal, 1738.5.12.

¹¹ Journal, 1738.5.17. 兄ジョンもルターのローマ書への序文で回心したことは感慨深い。

¹² Barrie, W. Tabraham, Brother Charles, (Epworth Press 2003), pp.37-38. ルターが主張した積極的義は神の賜物であり、「我々自身ではなく天から与えられる

⁷ Journal, 1:85.1738.4.28.

⁸ Ibid.

信仰義認は、これまでの自分の生き方を否定するものではなく、逆に、働く信仰、良き業、ホーリネスという具体的な信仰形態を生み出していく事に気づく。この後もチャールズの信仰の模索が続くのであるが、すでに彼が名付けた「ペンテコステ」への準備が満ちている様子が理解できる。

さらに、「5月20日にブレイ氏がマタイ9章1節から8節の「中風の人の癒し」の場面を読むのである。チャールズの日誌は以下のようにになっている。

喜びの涙の為に彼（ブレイ氏）が読み終えるのに長くかかった。私はそこに、その信仰が私の癒しの為には必要であり、それがペンテコステの日であることを見つけ、固く信じた¹³。

チャールズは、救いの確信が与えられる瞬間を、自分にとって「ペンテコステの日」と名付けているが、それは、救いが自分の業ではなく、聖霊の働きであることを強調する為に名付けた言葉でもあろう。ついにその日はやってきた。それは1738年5月21日の事であった。それはブレイ家で起こった。

III. ペンテコステ

その日の日誌にチャールズは以下のように書いている。少し長くなるが、詳細なこの日の記述は私たちのチャールズ理解に必要だと思うので記したい。

1738年5月21日 日曜日。私はこの日が来るという希望と期待で起きた。9時に兄と友人達がやってきて、聖霊の導きのもと、讚美歌を歌った。私の慰めと希望はここにおいて増進した。1時間半ほどして彼らは帰宅した。私は祈った。内容は以下の通りである。「イエスさま、あなたは『私はあなたのもとに来る』と言われました。『私はあなたに慰め主を送る』と言われました。あなたは、「私の父と私は、あなたのところに来て、あなたのとこ

もの」である。さらにルターは、この事がわかれば、良心の呵責も、恐れも、重荷もなくなる」と語る。

¹³ Journal, 1738.5.20.

ろに住まう」と仰っています。あなたは神、嘘をおつきになりません。あなたの真実を信頼します。あなたの時にあなたの方法でなしてください。」このように祈り、私は眠りにつく用意を希望と平安のもととした。私は、ある者が入ってきて以下のように語るのを聞いた。（声からマズグレイブ夫人だと思った）「ナザレのイエスの名によって起きて信じなさい。そうすれば汝の罪はすべて赦される。」私は、どのようにしてその言葉がマズグレイブ夫人の頭に入り、語ったのかと不思議に思った。私はため息をつき、自分に言い聞かせた。「キリストが私にこのように語りかけて下さるはずはない！」私は、沈黙し、震えながら横になった。そして思った「でもそれが彼であつたらどうだろう。」私は、少なくとも真実を知る為に人をやって確かめることはできる。」それで、私は呼び鈴をならし、ターナー夫人（ブレイ氏の姉）がやってきた。私は彼女をマズグレイブ夫人の所に行かせた。彼女は出かけていき、戻ってきて「マズグレイブ夫人はこちらには来ていないそうです」と言った。私の心はその言葉を聞いて沈んだが、それは、まさにキリストが来て下さったのだと信じたかった。しかしながら、私は再び彼女を調べる為に行かせたが、その間に不思議な動悸が心に起こるのを感じた。私は、「私は信じます。信じます」と語ることを恐れていた。彼女が再び来て、「それは弱い、罪深い生き物である私が語ったのです。でもそれはキリストの言葉でした。キリストが私にこれらの言葉を語れと仰ったのです。私にそれを強いたので、私は我慢できずに話しました」と語った。

私はブレイ氏を側に呼び、彼女の言葉を信ずるべきかと問うた。彼は、私がそれを疑わないようにキリストが私に語ったのだと言った。彼はそれを知っており、共に祈るように望んだ。しかし、「まず」と彼は言い、「私は普段開く箇所を読みます」と語り、「不義が許され、罪が覆われている者は幸いである。罪を持たず、霊においてずかしこくない者は幸いである」という言葉を読んだ。未だに私は、信じることに對する強烈な反抗と抵抗を感じたが、主の霊は私の霊、邪悪な霊、私の不信仰の暗闇を吹き飛ばすまで争われた。私は自分でどのようにして、またどの時点においてかは知らないが、確信しているのを感じ、とりなしの祈りをおこなった。

それからブレイ氏が私に、彼の姉がキリストによって行くように命じられ、私にこれらの言葉を語ったのだということ話をしてくれた。彼女は、自分が信じた方法について、私に、確信を与え、関連づけながら語ってくれた。真夜中に、私が病気になった瞬間、彼女はドアをノックする音を聞いた。彼女は降りていき、ドアを開けたところ、そこに、白い衣を着た人を見た。彼女は誰であるかを尋ねると、彼は「私はイエス・キリストである」と語り、激しく叫んだ。「入りなさい。入りなさい！」

彼女は驚いて起き上がった。即座に彼女に指示があった。「このことを気にしてはならない。これは夢であり幻であるから」。彼女は晩禱の時まで震えており、不安定になっていた。人々が晩禱を開始するや否や、彼女は、信仰の力に満たされていることに気づき、彼女は自分自身を抑制することが出来ず、自分が酔っているのではないかと疑った。同時に彼女は人類への愛と祈りに満たされ、私の所に行き、魂も体も回復することを確信させるようにしなさいという声を聞いた。彼女は家に帰り、喜びと勝利に満たされ、「私は信じます。信じます」と語ったが、彼女はくじけたので私に言葉をかけることはなかった。

日曜日の朝、彼女はブレイ氏をわきに呼んで、涙を流し、その事柄について告げた。彼女は貧しく、弱い、罪深い女性であるが、牧師（チャールズ）のもとに行くべきかどうかを相談した。彼女はそれをする事ができなかったし、それをするまでは落ち着かなかった。ブレイ氏は、彼女が以前もそのような状態になったのか尋ねた。「一度もありません」彼は行った「それでは行きなさい。ヨナの約束を思い出しなさい。あなたは脅しではなく、約束を語りに行くのだから。主の御名によって出かけなさい。弱さに恐れてなりません。言葉を語りなさい。キリストが業を為されます。赤子と乳児の口から強さを示された。」

彼らは、共に祈って、彼女は出かけたが、再び彼女は自分の中で祈るまでは、私の部屋に入ってくる事ができなかった。彼女が去って6分後、彼女が私に語っている間、ブレイ氏は、主が私たちと共にいて下さると感じていた。私も、そのような荘厳さをもって語られた言葉を聞いたことがなかった。彼女の声がマスグレイブ夫人の声に変化していた。(私の感覚が正確

であるとすれば) 私は起き上がり、聖書を読んだ。最初に目に飛び込んできたのは、「それでは、主よ、希望とは何か。希望はあなたの中にある。」私は再び目を下に落とすと、「主は私の口に新しい讚美をさずけてくださる。神への感謝さえも。多くの者がそれを見て、恐れ、主に信頼を置く」。さらに私はイザヤ書の「エルサレムの心に語りかけ 彼女に呼びかけよ 苦役の時は今や満ち、彼女の咎は償われた、と。罪のすべてに倍する報いを主の御手から受けた、と。」(イザヤ書 40章 2節)という言葉を読んだ。

私はキリストによって平安を感じ、愛するキリストに希望を感じた。その時までのその日の私の気持ちは、自分の強さを疑い、以前には感じたことがない弱さを感じていた。私は信仰によって立っているのだと気づいた。その信仰は、継続的な信仰であり、私が墮落するのを防ぎ、私が罪に陥り行くのを防ぐものである。私は弱さを覚えて床についたが、キリストの守りがあることを確信していた。

5月23日(月)、主の守りのもと、次の日の朝、私は目覚め、神さまが私の魂になしてくださったことを気品高く描写している詩編107編を読み喜んだ。私は眠気を感じ、2人の悪魔と戦っていた夢から起きた。私は一人の悪魔を私の足下に踏みつけていたが、もう一方は、私がキリストのものであるということ、私に立ち向かってきたが、力がなくなり、沈んでいき、消え去っていった¹⁴。

今日は、主を自分の王として見つめ、力ある方であると感じたが、十字架にかかった愛や過去の罪を見る事ができなかった。しかし、私は、謙虚に自分の弱さを認め、主の力強さを待ち望みたい。私は邪悪な考えが私の心めがけて突進してくることがあったが、即座に(それは私の力によってではないが)拒絶した。正午に、私は起き上がり、弱さを感じたが、支えられた。私は神が示してくださったイザヤ書43章によって強められた。

私の兄が来ることになっていた。私たちは、共にとりなしの祈りをささげた。祈りの途中に聖霊が私のところに來られたのを信じた。その晩、私たちは讚美をし、再び祈った。肉体的には弱さを覚えたが、私の友人の為

¹⁴ Journal, 1738.5.21

に、彼らの間にたてられた唯一の祭司として祈らなければならないと考えた。私は跪くと、即座に、心と体が強められた。敵はそのような時を逃さないで高慢の罪へと試みたが、私がより頼む神に感謝したい。その時以来、形式的にはなく、準備をもって、素直に祈ることを教えられている。私の為ではなく、主よ、私の為にはなく、あなたの栄光の為に。¹⁵

この日はチャールズにとって重要な日となったのである。長文なので、紹介することは控えようかと考えたが、筆者には、この一句、一句全てが尊いと思つた。チャールズの回心は、体も頑健ではない彼が、悩み抜いて、心身ともに衰弱した中で行われたものであり、魂の状態にしても、罪を感じ、弱さを感じる中で格闘する中で与えられたものであることがわかる。そして、その働きは、徹頭徹尾、神が準備されたものであり、聖霊の働きによって起こったものであることがよくわかる。さらに、神の御言葉が適所に引用されており、チャールズの確証を強めることになっている。興味深いことに、チャールズに最終的に信仰を語ったのは、ブレイ氏の姉のターナー夫人であった。

チャールズが求めてきた事がついに実現した。チャールズの回心は、ペンテコステと言われるごとく、聖霊の導きのもと、起こったことが理解できる。

IV. チャールズ回心の意味するもの

問題はジョンの回心の場合もそうであるが、この回心が一体何を意味するかということである。この回心は、「不信仰」から「信仰へ」という回心だったのか。この立場をとると、それ以前のチャールズは信仰を持たなかったことになる。あるいは、回心体験は、「名目的なクリスチャン」から「真実のクリスチャン」への変化なのか。

これを考察している研究書にタブラハムの「兄弟チャールズ」がある。タブラハムは、チャールズが回心を表す用語として「信仰」「新生」「内なる変化」「新しい創造」という用語を使用していることに注目すれば、急進的な変化を

考えていたことだけは確かではないかと語っている¹⁶。しかし、彼は、現代の回心理解をチャールズに適用しようとするが無理があるとしながら二つの立場を紹介する。

第1の立場は、「古典的な福音的用語として回心」である、「業による救い」から「信仰による救い」への変化である。チャールズは、ペンテコステと言われる回心日以降も、悩みをかかえ、信仰の確信の揺らぎを感じているという事実がある。その結果、**1738年5月21日**を前後に、回心の区別をつける見解は、チャールズの回心を瞬間的というだけの観点から捉えてしまい、それ以前のチャールズの人生における信仰模索を無視することになる¹⁷。

もう1つの立場は、カトリックの神学者マキシム・ピエトの立場である。実際、ジョン・ウェスレーの**1725年**の回心を「道徳的回心」と名付けたのは彼であるが、ピエトは、**1738年**の回心は、「ジョンのその後の生涯をわずかに異なった方向へと位置づけた突然の感情の波」に他ならなかったとしている¹⁸。この立場は、ジョンの回心を**1725年**の回心を基礎に考えており、**1738年**の回心の価値を矮小化する可能性があり、信仰の揺らぎを、やはり無視してしまうことになってしまう。また、それをチャールズの回心にもあてはめることが、どれだけ正当かは疑問である。筆者は、突然の感情の波以上のものをジョンやチャールズの体験は持っていたと考える。前述の日記をみればそれが良く理解できる。

タブラハムは、この**2つ**の見解以外にも重要な証言者としてスザンナの手紙を紹介する。スザンナはある回心を知って、「何と感謝な事でしょう。罪の邪悪さを神の本性とは全く異なるものとして、あなたがみていることは」¹⁹と述べている。しかしその後、スザンナは「あなたは義とする信仰を手紙の中であたかも最近獲得したかのように言っているが、それは間違いではないか」と言っている。ここで、スザンナの言おうとしていることは、チャールズの**5月21**

¹⁶ Ibid.

¹⁷ Ibid., pp.40-41.

¹⁸ Ibid.p.41.

¹⁹ Charles Wallace (ed.), *Susanna Wesley, The Complete Writings*, (Oxford University Press, 1977), pp.175-77.

¹⁵ Journal,1:29-30.

日のペンテコステと呼ばれる回心は、「信仰の欠けの新たな発見」というよりは、「彼の人生に既に存在していた神の恵みをもう一度適切に理解した」という事である²⁰。結論として彼は以下のように語る。

それ以降（回心体験）、チャールズは、個人的なホーリネスを信仰と関連づけることが可能であり、義務の奴隷ではないことを感じることはなかったということである。1735年5月21日に起こった出来事は、彼が神によって受け容れられているという、内的な実現、確信を与えられたということである。1738年以前も彼はクリスチャンであったのであり、そこから喜びが心にあったということである²¹。

筆者もタブラハムの見解に基本的に同意する。しかし、チャールズが英国教会で育ってきたという事実を見逃す訳にはいかな。当時の英国教会は、義認と聖化の順序については、信仰よりも善行を通して義を獲得する要素が強かった。極端にそれを表現すれば、「聖化から義認へ」という順序である。チャールズは、モラヴィア派、特にベラーから大陸の回心理解を与えられて、「義認から聖化へ」という新たな視点が与えられ、それが「回心」につながったのであり、その意味で、信仰の秩序の整合性が1738年5月21日に成就したと解釈してもいいのではないかと考える。そして回心後、確信の揺らぎは、英国教会の回心理解と、大陸の宗教改革的な回心理解の両者がチャールズの中に並存し、それが次第に整理されて賛美へとつながっていったと考える。何故ならば、チャールズは聖化理解においては、瞬間的な理解よりも漸次的な理解を持っているからである。

V. 回心の讚美について

²⁰ Tabraham, op.cit., p.41.

²¹ Ibid., p.42.

チャールズの回心は、求めることの終わりであると同時に、使命の始まりでもあった。彼らは、今や、神の意志を求める喜びの息子であった²²。チャールズは回心の体験を讚美にあらわすことを決意した。チャールズの回心の2日後、1738年5月23日の日誌である。

9時に、回心についての讚美歌を作り始めたが、高慢になることの恐れから、それを中断するように説得された。ブレイ氏が来て、中断することはサタンの策略であり、作詞を続けるようにという励ましを受けた。私はキリストにそばにるように祈った、そして讚美歌作詞を終えた。後にそれをブレイ氏にみせたが、悪魔は、炎のダーツを私に投げ、作詞すべきでなく、神を喜ばせなかったかのように誘惑してきた。私の心は沈んだが、祈り書を見つめた時に私は、答えを見つけた。「なぜ自分を誇示しようとするのか。あたかも汝が、暴君であり、人に危害を加えることができるかのように。」この点で私はそれが敵の策略であり、神から栄光を奪うものであると感じた。語ることが神の国やキリストに栄誉を帰することを危険に陥れる時、主にあつて謙虚に語ることは困難である。神が私たちの魂になしたことに於いて語ることは最も困難なことであるが、神はやさしく私たちを高慢から守られる。神は高慢から守ってください。それ故に、主の名に於いて、主の力に於いて、私は主に誓いをたて、もし、主がそのことを喜ばれるならば、心の中に主の義を隠しはしない²³。

その時の讚美は以下のようなものであった。

私の痛みとともにあつた葛藤にうんざりすること

私の本性の鎖を信頼する希望のなさに

私はもはや戦いを挑まない。

しかし、私は自分で自分を自由にしようとはしない

²² Mitchell, op.cit., p.70.

²³ Journal, 1748.5.23.

あなたへの単純な信仰で私は呼びかける
私の光、私の命、私の主、私のすべて
私は水が動くのを待つ
私は、すべてを語る言葉を待つ²⁴。

上記の賛美通りに、チャールズは、次第に健康を復し、自分の回心体験を語るようになっていく。時には、30名もの人々の前で証しすることもあったという。しかし、すべてが順風満帆であったわけではない。自分の気持ちの抑揚をチャールズは経験している。

今日とはまどいの連続であった。私は祈れず、礼典を行う気にもなれず、祈ることすらできず、交わりも出来ず、死にたいという臆病心にさいなまれた。……私の死への願望は続き、次の日にはさらに増した²⁵。

チャールズの苦しみの様子は6月1日～3日まで続く。それは霊的には高揚していても肉体的には弱いという相互関連であった。しかし6月3日が終わる頃には、彼の霊性は回復し、信仰は輝いた。そのような苦しみの深みから脱出するには、再び原点に戻り、神を賛美し、他者を助けることが必要であった。チャールズもジョン同様、回心の経験をしても、様々な信仰の動揺にさいなまれていることがわかる。その葛藤の中にあっても、次第に信仰の確信が与えられて、チャールズの口から賛美がおこってくるのである。

VI. チャールズの回心の讃美歌 新聖歌 62番「主イエスのみいつと」

²⁴ The Poetical Works of John and Charles Wesley, 1:83.

²⁵ Journal, 1:98.

チャールズの回心の讃美歌において、最も有名なものは、讃美歌62番「主イエスのみいつと」であろう。この讃美歌は、その人の回心の記念日に歌われるべき讃美歌として

名付けられているものであり、チャールズの回心日である1738年5月21日からちょうど一周年である1739年5月21日に書かれたものである。主題は、「罪人に対して神のもとに立ち帰ることを呼びかける讃美歌」である。²⁶ 尚、この讃美歌のタイトルでもある「数千もの舌」という言葉は、ヨハン・メシュナーの讃美歌である [O dass ich tausend Zungen hatte] からとられたという説やペーター・ペーラーがチャールズに対して語った言葉で「もし千もの舌を持っていたならば、それらを使用して神を賛美するであろう」からとられたという説もある²⁷。ミッシェルは、チャールズが回心の証しをする時に、一人の舌で回心の喜びを表すには不足するので何千ものという言葉を採用したとしているのは興味深い²⁸。日本語訳は以下のようになる。

- | | |
|---------------|-----------------------|
| 1. 主イエスのみいつと、 | みめぐみとを |
| ことばのかぎりに | たたえまほし |
| 2. とうときわが主よ、 | たかき御名を |
| ひろむるこの身を | たすけたまえ |
| 3. うれいをなぐさめ | おそれを去る |
| み名をばつみびと | 聞くうれしき |
| 4. くらきのちからを | イエスはくだき |
| 血をもてあがない | すくいたもう |
| 5. 死にたるころも | 活きかえらせ |
| のぞみをあたうる | み名をたたえん ²⁹ |

²⁶ The Works of John Wesley Bicentennial Edition, (Abingdon Press 1983), VOL7, p.79.以下 BE Works と記す。

²⁷ Ibid., p.80.

²⁸ Michel, op.cit., p.78.

²⁹ 新聖歌 62 番、日本福音連盟新聖歌編纂委員会、2001 年

讚美歌略解は、この讚美歌を以下のように語っている。

メソヂスト運動の旗印となった有名な讚美歌である。この歌は、作詞者の靈的再生満一周を記念して、1739年に作られた。原作は **Glory of God, and praise, and love** という初行をもって始まる18節の歌であるが、今では普通第7節から第12節までがうたわれる。現在の初行 **O for a thousand tongues to sing** はウェスレー兄弟を回心に導いたモラヴィア派の伝道者ペーター・ペーラーの表現に基づいていると言われる。この歌は、1779年、ウェスレー歌集の巻頭に置かれて以来、最近まで各国のメソヂスト歌集のトップの地位を占めていた。邦訳は曲のリズムに合わせるためにだいぶ修正された³⁰。

続いて英語訳では、日本語の訳もつけると以下ようになる。

1 **O FOR a thousand tongues to sing My great Redeemer's praise, The glories of my God and King, The triumphs of his grace!** 私の偉大な贖い主を讚美する数千もの舌よ、神と王の栄光、主の恵みの勝利を讚美しよう！

2 **My gracious Master and my God, Assist me to proclaim, To spread through all the earth abroad The honours of thy name.** 私の寛大な主、私の神、すべての地、外国にも、宣教できるように助けて下さい。あなたの名前に栄光がありますように！

3 **Jesus! the name that charms our fears, That bids our sorrows cease; 'Tis music in the sinner's ears, 'Tis life, and health, and peace.** イエスよ、我らが恐れをなし、我らの悲しみを止めさせるように命じるその名、罪人の耳に聴かせて下さい。「この命、健康、平安」。

4 **He breaks the power of cancelled sin, He sets the prisoner free; His blood can make the foulest clean, His blood availed for me.** 主は、無効になった罪を破壊し、囚われ人を自由にする。主の血は、違反をきれいにし、主の血は私の為にこそある。

³⁰ 『讚美歌略解』、日本基督教団讚美歌委員会、昭和29年、56-57頁。

5 **He speaks, and, listening to his voice, New life the dead receive, The mournful, broken hearts rejoice, The humble poor believe.** 主は、語り、声を聞いて下さる。死人も受け取る新しい命、嘆き、破れた心も喜び、謙虚な貧しい者は信じる。

6 **Hear him, ye deaf; his praise, ye dumb, Your loosened tongues employ; Ye blind, behold your Saviour come, And leap, ye lame, for joy.** 耳の聞こえない者よ、聞け。口のきけない者よ、ほめたたえよ。あなたの解き放たれた舌を使用しよう。目の見えない者よ、救い主が来られるのを見よ。足の不自由な者よ、喜びの為に跳べ。

7 **Look unto him, ye nations, own Your God, ye fallen race; Look, and be saved through faith alone, Be justified by grace.** 国民よ、あなた自身の神、主を見上げよ。墮落した民よ。見上げよ。信仰のみによって救われよ。恵みによって義とされよ。

8 **See all your sins on Jesus laid: The Lamb of God was slain, His soul was once an offering made For every soul of man.** あなたのすべての罪がイエスの上におかれたのを見よ。神の子羊は屠られた。主の魂においてささげものが私たちのすべての民の魂の為になされた。

9 **Awake from guilty nature's sleep, And Christ shall give you light, Cast all your sins into the deep, And wash the 'thiop white.** 罪深い本性に眠っていないで醒めよ。キリストはあなたに光を与える。あなたの罪を深い所へ投げ込め。汚れ(硫黄)を白くなるまで洗え。

10 **With me, your chief, ye then shall know, Shall feel your sins forgiven; Anticipate your heaven below, And own that love is heaven.** 私と共に、あなたは知ることになる。あなたの罪は赦された。あなたの下にある天に期待せよ。愛をわがものにせよ。その愛は天のものである。

VII. チャールズの讚美歌の幾つの特徴

ここではチャールズの讚美歌の特徴を前掲の「主イエスのみいつと」から

幾つかあげてみたい。

1. すべての人の為の救いへの招き

何よりもチャールズの讃美歌には、救いはすべての人のものであるという確信がある。上の讃美歌においても数千もの人々の舌からでる讃美を一番に持ってきた背景には、救いの喜びと共に、救いは信じる者に必ず与えられるという確信がある。「主イエスのみいつと」においては、特に英語の歌詞の 6、7 節は「罪人への招き」と呼ばれている節であり、回心を呼びかける宣教の強調がある。³¹ 園部氏は「チャールズの讃美歌」の中で、チャールズの主題の一つに「神の愛の広大さ」があることを指摘している³²。ちなみにチャールズの讃美歌において、愛は 1500 回あらわれると言われている。この数は一つの讃美歌に一回現れるほどである³³。英語の詩においても、最後に、「その愛は天のものなり」という言葉がある。この讃美歌の詩は、チャールズの経験そのものから書かれたものであり、回心の結果生きることができる第 2 の生、真実の喜びの人生を伝えたものであると言われている。興味深いことに、日本語の讃美歌では、5 節が最もこのテーマに近いことである。「死にたるこころも 活きかえらせ のぞみをあたうる み名をたたえん」おそらく、チャールズの回心の教理の結論的なものと考えたのではなかろうか。これは、チャールズの回心の様子が最も表現されている言葉であり、伝道への招きでもある。英語版と日本語版の 2 節は共に伝道への招きである。救いのすばらしさを知った者が伝道への情熱に駆り立てられる様子が見事に表現されている。

2. キリストの血による贖い

4 節には「キリストの血の有効性」の強調があげられる。主の血は犯した罪責を清める。これは、日本語の讃美歌にも「血による贖い」が歌われている。

³¹ BE Works, 7:79.

³² 園部 治夫「チャールズ・ウエスレーの讃美歌」、「礼拝と音楽」9号、日本基督教団出版局、1976年、21頁。

³³ John R Tyson, - Charles Wesley on Sanctification A Biographical and Theological study -, (Francis Azbury press, 1988).

これについて、素晴らしい分析を為しているのがタイソンである。その著、『チャールズ・ウエスレーにおける聖化論』³⁴の中で4章全体をイエスの血に関する考察にあてている。キリストの血は、「犠牲の血、贖いの血、ふりかけられる血、聖なる血、尊い血、清める血、洗う血」という多様な意味合いを持ち、キリストの贖いが血によることを強調している。チャールズは聖餐の為の讃美歌を数多く残しているが、そこにもキリストの血のもたらす有効性が多くあげられている。血についての分析は、タイソンの著に示されているので、ここでは血の強調があることだけにとどめ、論述を避ける。しかし、次の事は述べなければならない。

キリストは十字架に死なれたが復活されたことにより、継続的に牧会されている。それ故に、贖いは、完了しているが、未完でもある。ミッシェルは以下のように語る。「贖いは覆いを引き裂いた。キリストが聖所に入り、聖所にある祭壇にキリストの血をふりかけられた。それが福音の恵みの祭壇となったのである」³⁵。それ故に、贖いの血に出会う為に我々は聖餐に与るのである。

3. 謙虚のすすめ

救いは無条件に与えられるのであるが、信仰者には謙虚さが求められる。英語版の 5 節に「謙虚な貧しい者は信じる」「嘆き、破れた心も喜ぶ」という言葉があり、6 節にも、関連した言葉がでてくる。残念ながら日本語の讃美歌にはそれに準じる言葉はなかった。しかし、謙遜はチャールズの救済論にとっては重要な概念である。自己の正しさ、努力により頼むのではなく、自分の努力により頼む空しさをチャールズは痛感したのである。チャールズは、回心においてそれを確認したのである。これは彼の身体的弱さとも関連する。チャールズほど身体の弱さを感じている者はいなかった。絶えず心身の弱さとの戦いを強いられた彼は、自分の努力が救いには何ももたらさないことに誰よりも気づいていたのではないか。しかし、真の謙遜を与えられた彼は、救いの確信を主から与えられるのである。

³⁴ Ibid., p.158.

³⁵ Michell, op.cit., p.201.

4. 聖化へのかわき

これは、英語の詩の9節と密接に関わる。「洗う、清める」という言葉がそこにはあるが、これは罪の本性を神によって洗い流していただき、救いを受けた後にも、信仰者は信仰を働かせて神の恵みを受け取ることが求められている。主の恵みを求めることの重要性がここにはある。救いの確信を受けた者は、その後も常に神から与えられる罪の洗いに期待して讃美を続ける。まさに義認は、キリスト者の天国への旅の開始を意味するのである。

結論

この論文では、チャールズの回心体験を論述し、特にチャールズが回心について作詞した日本でも有名な讃美歌を一曲選び論述してきた。回心体験はチャールズにとっては一つの転機となった体験であるが、彼の信仰がよく表現された内容となっている。しかし、日本語にその讃美歌を翻訳する場合に、彼自身の作詞した讃美歌の半分は掲載されない結果となっているのは残念である。筆者も最近ようやく、英語の歌詞の意味が自分の心と身体に合ってきて、英語の讃美歌の歌詞の力を感じることができるようになってきたが、日本語の訳は、キリストの贖罪の事実を語るにとどまり、それがチャールズの救いにどのように影響を与えたかについてはあまり表現されていないように思う。

最後にもう一つ付加しなければならないことがある。それはチャールズの讃美歌の意義がアルミニウムに根ざしていたことである。アイザック・ワッツはカルヴァン主義の讃美歌作者であった。チャールズの讃美歌には神学が伴っている。チャールズのウェスレアンアルミニウムとしての賛美の掘り下げも今後の課題となるであろう。メソジストは、チャールズの賛美により、「シングングメソジスト」と呼ばれ、会衆賛美が存在していなかった時代に、会衆も賛美できるという改革をもたらした。その影響は今日も生きているのである。筆者は、今後、チャールズの生涯をひもどきつつ、歌詞の中に含まれている神学的意義に注目しながらチャールズの思想を研究していきたいと願う。